（平成 29 年 10 月 10 日発行　月刊「円福」495 号付録　昭和 52 年 5 月 25 日第三種郵便物認可）

マラソン大会特集号です。子どもたちは全力で練習し、全力を出し切りました。

おふいやり

№298
平成 29 年 10 月 10 日発行
社会福祉法人円福会
円福寺愛育園
理事長　藤本光世

園長を退任しました。

理事長　藤本光世

日ごろ、円福寺愛育園にご支援をいただき、ありがとうございます。さて、私こと、9 月 30 日をもって園長を退任いたしました。新園長には青谷幸治副園長を昇格しました。

私が園長に就任したのは、平成 20 年 10 月 1 日でした。当時の愛育園は大混乱の中にありました。職員は割れていて、子どもは荒れていました。アノミー状態とはこのようなことを言うのでしょうか。十年以上の長い間に鬱積したものが、平成 20 年 4 月の園長の交代を機に噴出したと思いました。その上に、内憂外患という言葉が当てはまるように、内部の混乱は円福寺愛育園を弱体化して、外部から理不尽な攻撃を受けました。外部にとってみれば、この機にとばかりに愛育園に襲い掛かったのでしょうか。

この危機にどう対応すればいいのか。

私はこの混乱の中で、佐久長聖高校を勤め続けることができずに、7 月 31 日付で退職して、愛育園の理事長として全力で混乱の収拾にあたっていました。私が 4 月に就任させた園長がいましたので、自分が園長になることは考えていませんでした。ところが、9 月末に愛育園を訪ねられた第三者委員の有吉先生から「佐久長聖の校長を退職されたのですから、園長になれますよね。」と背中を押されました。フレックスの矢島理事さんには「理事長が園長を兼ねるという事は、対外的には愛育園の立て直しに本気になって進むこと示す。」と言われました。それで、当時の園長を園長代行にして職員室の園長の机で仕事をしてもらい、私は園長にはなったものの理事長室で執務したのでした。児童養護施設の仕事は、専門家ではありません。分からないことばかりでした。それで、30 年以上の経験がある園長代行に実際の仕事は任せたのでした。

平成 21 年になって、私の園長就任を待っていたかのように、青谷が復帰してくれました。父の予言通り、3 年間の外部の仕事を経て、きっと自分の天職は愛育園と決めて、戻って来てくれたのだと思います。以来、彼の力で愛育園は見違えるようになりました。子どもたちは「夢」を意識して、「夢」に向かって毎日の生活を頑張るようになりました。戸隠キャンプや愛育園祭をはじめとしたすべての行事に全力で取り組み、充実感と満足を得るようになり、それが毎日の生活に反映するようになりました。弱い心とたたかい励まして毎日を過ごす子どもが増えました。子どもたちは明るく、笑顔があふれるようになりました。

対外的には、平成 28 年度に児童福祉施設連盟を退会し、様々なしがらみから脱却して、愛育園の養育力を高めることに専念できるようになりました。職員一人一人の養育力が高まり、しっかりした養育方針の下で一致して子どもを育てることができるようになりました。私には、児童相談所の信頼も増しているのではないかと感じています。

今年、国は「新しい社会的養育ビジョン」を発表して、社会的養護は家庭的環境で進めるべきであるという考えを強く推進しようとしています。園長を辞するにあたり、棚を整理していると、古いノートが目に付きました。それは、父が長野清泉女子保育専門学校で養護原理を講義した時のノートでした。昭和 45 年度の学生の名簿が貼ってありました。読んで驚きました。そのころから、施設の養育形態について家庭と比較して激しい議論があったのでした。その第二講の「家庭と児童」「児童収容施設」を紹介しましょう。その中で次のように書いています。

「家庭こそは児童にとってかけがえのない大切なものであることに相違はない。しかし家庭が児童養護の機能を失った場合、また児童に問題があって家庭において養護することが不適当の場合、児童は児童収容施設において養護される。児童収容施設は家庭の代替として児童を養護する施設であるが家庭ではなくまた家庭ではあり得ない。児童にとって施設はやむを得ぬ養護の手段である。それ故家庭至上主義よりすれば児童を施設で養護することは好ましくない劣等処遇であって児童は家庭で養護されることが最上であり『最悪の家庭といえども最良の施設よりはまさる』と極限され…云々」

更に、第三講の「家庭と施設の比較」では

「施設の形態はできるだけ家庭に近づけねばならないという意見と、施設は結局家庭ではあり得ないのであるから施設として独自の治療教育をすべきであるという意見がある。前者は里親制度、家庭養護寮、小舎制方式を良とするものであり、後者は治療技術、集団指導、個性指導による大舎制方式を良とするものである。実はこの論議の中にこそ養護原理の根本課題が存在するのであって、結論は、**その両者のいずれが是であり非であるかではなく**、その両者の意図すべてを取り入れることこそ養護原理なのである。」と書いています。

父は、両者の意図すべてを取り入れるために中舎制方式を考案し、円福寺愛育園は児童にとって最低の養護手段といいながらも、最良の教育的養護手段としての実践を後継に託したと思っています。さらに、『施設は児童のために故郷になってくれる』では、アフターケアは施設能力の限界の中で、如何に進められなければならぬか、養護原理の未開拓な課題である、と書いています。これらのたくさんの課題を、実践を通して開拓することが、今円福寺愛育園に出来つつあります。新園長は愛育園の養育実践を通して父が願った新養護原理の開拓を、必ずや成し遂げてくれるでしょう。

これからは、理事長として円福寺愛育園の養育を見守ります。皆さまには、円福寺愛育園の養育を温かく見守って下さいますようお願い申し上げます。

（平成 29 年 10 月 10 日発行　月刊「円福」495 号付録　昭和 52 年 5 月 25 日第三種郵便物認可）

園長就任のご挨拶

園長　青谷　幸治

この度、10 月より円福寺愛育園の園長に就任することになりました。まだまだ経験不足ではありますが、いままで同様に子どもたちや先生方に囲まれながら学び、そして成長していきたいと思っています。平成 24 年度から 5 年半に渡り副園長として子どもたちと関わり児童の自立に向けて取り組んでまいりました。自分に対して納得のいく養育にはまだほど遠いですが、自分としては精一杯関わってきました。子どもたちが目を輝かせて目標に向かって努力する姿や人のために優しく、助け合う姿が目に付くようになり本来の子どもらしさを感じることができています。創立者である藤本幸邦老師の教えである「心の教育」が子どもたちの心に浸透してきていると思っています。

愛育園の養育方針は、児童の自立です。社会に貢献できる立派な人間を育てること。勉強ができるだけでなく、それ以上に人間力を身につけ心を育て自己成長することが自立の根幹だと思います。そして児童の養育を高めるためには、まず私を含む職員の人間力を高めることです。「当たり前のことを当たり前にできること」「自分がやってほしいと思うことを人にやってあげること」。レベルの高いことを要求しているのではありません。仕事をオープンにし、人のために尽くせる職員を目指す。約束は守る。嘘はつかない。ごまかさない。正直にそして素直な姿勢で取り組む。そんな当たり前のことを職員全員が身につけ子どもたちと関わっていければと考えています。

子どもたちは、いろんな家庭の事情で愛育園に来ています。縁あって愛育園で学び新たな人生を切り開こうとしています。私は、愛育園の子どもたちが大好きです。一生をかけて愛育園の子どもたちの支えとなり、人生設計のお手伝いをしていきたいと思います。

法人役員の皆様、西横田区の皆様、中央児童相談所をはじめ児童福祉関係の皆様方、愛育園をご支援していただいている方々には、日頃よりご支援、ご協力いただき感謝しております。今後も子どもたちのために応援していただき、支えていていただければ幸いです。そしてこの先 10 年、20 年と愛育園が発展し、地域の子育て、養育の拠点になり社会に恩返しできる施設を目指し、新たなスタートを切っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

第１回　愛育園マラソン大会

園長　青谷　幸治

9 月 24 日、第 1 回愛育園マラソン大会を開催しました。例年、この時期に運動会を行う予定でしたが中高生が活発になり部活動やアルバイト、就職活動など園内に留まることなく外での活動が増えたことで、運動会の開催を中止することとなりました。しかし園外での活動の場が増えたことは中高生の自己成長につながり嬉しいことではあります。

園内では特にマラソンに力を入れていたこともありマラソン大会を行うことになりました。3 週間、毎日自己記録を塗り替え、自分の心に負けず努力し自己を高めることができました。マラソン当日も自己ベストを目指し、一人も手を抜くことなくゴールすることができました。たった十分少々のことではありましたが子どもたちは努力の成果が出て、誇らしい顔をしていました。

運動会は愛育園全体で作り上げ、紅白で勝負することはもちろん。紅白合同で見せる応援合戦を準備してきました。年間行事の中でもっとも達成感と大きな経験ができ、子どもたちにとっても職員にとっても自己成長の場でした。その大きな行事は中止になりましたが、それに匹敵するぐらいの行事になったことは開催する意味がありました。子どもたちの生活スタイルが変わっても目的のある行事を作り上げていくことの大切さを学ぶこともできました。みなさんお疲れ様でした。

愛育園マラソン大会

あおぞら保育士　近藤誠志郎

9 月 24 日にマラソン大会が行われると決まり、子ども達は 9 月 3 日からマラソン大会に向けた練習を始めました。園の近くを流れる、千曲川の土手沿いをスタート地点から橋まで走って帰ってくる往復約 3 ㎞のコース。本番と同じこのコースで毎日タイムを計測して走ります。マラソンが得意な子、苦手な子といますが一生懸命な気持ちではみんな、負けていません。「昨日よりも絶対速く走るぞ」「ベストタイムを出すぞ」とやる気十分。毎日測定したタイムを書いて表にしていくと、大会が近付くころには、練習を始めた時に比べ 1 分も 2 分も速くなっています。私も練習に参加していましたが、日に日にタイムを伸ばしていく子ども達の気迫はすごいもので、私も自然とその勢いに乗り、タイムが伸びていきました。

大会当日は晴天となり、9 月下旬としては少々暑いと感じる天候でした。私は先導係として先頭の子どもの前を走りましたが、当日の子ども達の勢いは物凄く、「オーバーペースだな、最後までみんな走り切れるかな」と心配になりました。先頭の子は練習の時からずっと一番で走り続けていた

（平成 29 年 10 月 10 日発行　月刊「円福」495 号付録　昭和 52 年 5 月 25 日第三種郵便物認可）

H 君。ただ、まだ練習でも 9 分を切った事がなく、「今日は 9 分を切る」とスタート前から意気込んでいました。やや飛ばし気味の H 君。暑さもあり、折り返し地点でもうすでに限界のように見え、倒れるのではないかと心配になりました。しかし、折り返してからも粘りに粘って、あと約 300m、ゴールが見えてきました。私の手元の時計でぎりぎり 8 分台でるかどうか、後ろを振り向いて「8 分台出るぞ、頑張れ」と声をかけました。そこからは H 君の底力です。身体に残っていた力を絞りだし、絞りだし、懸命にゴールまで走り続けます。まさに魂のラストスパート。倒れ込むようにしてゴールテープを切り、タイムは見事 9 分を切ることが出来ました。H 君の諦めない心、自分に負けない心をその走りに見た気がしました。その後も他の子ども達が続々ゴールしていきます。H 君同様、暑さの中ではありましたが、練習の時よりも速く走ってくる子も多く、みんな本当に必死に走っているんだなと感じました。

夕食の前には表彰式があり、上位で走った子、練習を含め頑張った子にはそれぞれメダルが渡されました。また子ども達全員に参加賞として文房具のプレゼントがありました。それらを貰った時の子ども達の満足そうな顔を見て、がんばったからこそ素直に喜ぶことが出来ているのだと感じました。まだまだ 10 月にもマラソン大会は控えています。次の目標に向かって、子ども達と共に全力で走っていきたいと思います。

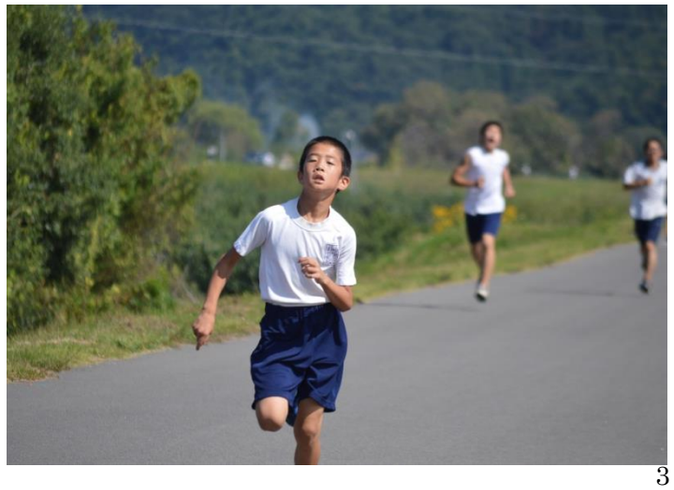
第１回愛育園マラソン大会とサプライズ誕生日会

あおぞらホーム長　冨沢正樹

9 月 24 日、第 1 回愛育園マラソン大会が行われました。

今年も本番に向けて、毎日練習しました。練習から去年以上に頑張る姿が見ることが出来ました。約一か月練習しましたが、まず練習の序盤でヒートアップしていたのが男の子の中高生でした。記録更新を目指して、毎日とにかく全力で走る走る。そうすると、次第に小学生達に伝播してきて、今度は、小学生達がすごい勢いで走り出すようになりました。

基本的に男の子は 3 キロ、小学生の女の子は 2 キロと定めて練習をしていたのですが、練習開始から 1 週間で、「私も 3 キロいける」と言い出す子が出てきて、今度はその勢いが伝播してあっという間に、全員が 3 キロを走るようになりました。ちなみに、もう少し詳しく話をすると、この「私も 3 キロいける」と言い出した子は、小学 3 年生のＭちゃんでした。これまでＭちゃんはどちらかというと、運動は得意な方ではなかったし、嫌な事、辛い事があるとすぐに拗ねてしまう子でした。同学年には、スポーツが大得意で足の早いＴちゃんがいました。だから、Ｍちゃんが「私も 3 キロいく!」と女の子の中で誰より先に言いだしたのは、本当に驚きでした。去年から少年野球を始めて、その影響もあるだろうと思いましたが、何よりも、向き不向きではない。頑張ろうとする心が何よりも大事なんだ。と改めて思いました。



書き切ることは出来ませんが、今年は、過去最大にお互いにいい影響を与え合ったマラソン大会となったと思います。中３のＨ君は最後まで毎日トップで走りきり、入所したばかりの中２のＫ君も記録を目指して毎日走り、中１のＫ君は職員の記録を抜こうと必死に走り、小４のＹ君は中学生に迫る勢いで走り、小２

のＳ君は練習後半になってからも 4 日連続で新記録を出したり、あちこちでいい影響を与え合っていて本当に良い光景でした。

大会当日は、練習以上の力を発揮して、新記録を出す子がたくさんいました。練習であれだけ本気で走って、本番でも新記録を出すあたりが、本当に心が強くなってきている証拠です。とても良いマラソン大会になったと思います。

そしてこの日は、もう一つ、子ども達とこっそり計画していた事がありました。石崎先生(主任保育士)のサプライズ誕生日パーティーです。石崎先生は愛育園に 10 年も勤めている愛育園大好き先生です。そんな石崎先生が子ども達は大好きです。ビデオレターや誕生日ケーキ、メッセージカードのプレゼントをしましたが、その全てが心のこもった物でした。私は、ビデオレターの製作でカメラを回す事が多かったのですが、みんな照れながらも素直に「おめでとう」「大好き」「ありがとう」の言葉を口にしていました。みんなの心からの言葉と表情に、カメラをまわしながら「こんなの言われたら泣いちゃうなぁ」と思っていたら、当日、ずっと号泣していました。また、そんな石崎先生を満足気な顔で見つめている子ども達の姿が印象的でした。初めての試みでしたが、大成功の誕生日会となりました。

第１回　愛育園マラソン大会

主任保育士　石崎　早織

９月２４日に第１回愛育園マラソン大会が行われました。本来ならこの時期は運動会を行う予定でしたが、中高生も部活やアルバイトも忙しいので、形を変え、マラソン大会を行うことにしました。９月上旬から毎日練習を始め、最初は２キロの距離からスタートした子どもたちでしたが､それが３キロとなり、距離は少し伸びたものの毎日一生懸命練習に取り組んでいました。去年に比べると明らかに全体のタイムも縮まっており、ベストタイムを更新する子どもも多くいました。大会当日はどの子どももベストタイムを更新したく本当に一生懸命取り組んでいました。その結果ベストを更新する子どもが多くいました。最後まで頑張った結果が出て本当に良かったです。

第一回マラソン大会

まごころ保育士　渡邉梓

今年は、残念ながら愛育園運動会が出来ないという事を知らされた時、子ども達は運動会を楽しみにしていた分、とてもショックを受けていました。しかし、代わりにマラソン大会を行うと聞くと、「やったー！」「がんばるぞ！」と子ども達の中から前向きな声が聞こえてきました。毎年、中高生は３ｋｍ、小学生は２ｋｍと決められ、走れる子は誰でも３ｋｍに挑戦していました。マラソン大会に向けて、９月３日から毎日、マラソン練習が行われました。まごころの小学生は特に、走るのが苦手、好きじゃないという子も多く、はじめのうちは「走り切れればいいかな…」という様子でした。しかし、練習を重ねるにつれて、「昨日よりも１秒でも速く！」「〇〇ちゃんを追い抜くぞ！」「今日は自己ベストを更新する！」という声が多くなりました。それだけでもすごいのに、「早く自分もみんなのように３ｋｍ走りたい！」という声も聞こえてきました。正直、驚きました。「〇〇ちゃんが３ｋｍ走りたい」と言うなんて思ってもみませんでした。みんなが一生懸命に走っている姿を見て、「自分ももっと頑張れる、もっと頑張りたい！」と思ったのでしょう。これは彼女にとっての大きな変化ですし、一緒に頑張ってくれる人がいる事が大きな力を生むのだということを目の当たりにしました。

マラソン大会の時間は決して長くはありませんが、一人一人が精一杯走り切って、常に上を目指す姿、児童同士が切磋琢磨する姿が見られ、とても良い行事になったと思います。

『マラソン大会』

まごころ保育士　竹内早季

今年のマラソン練習が始まり、心から驚いたことは子どもたちの走るスピードです。昨年より格段に速くなっており、子どもたちも日々ベスト更新に向けて張り切っていました。昨年までは 2 キロを走っていた子どもたちも全員 3 キロへ自ら挑戦しています。心配になり「3 キロで本当に大丈夫？」と聞いても「大丈夫！」と意気込んでいてみんなの向上心が素晴らしいなと感じました。中には走ることが苦手で人よりも遅れてしまう子もいましたが、やりたくないなど弱音は一切言わず

毎日欠かさず練習していました。M さんは昨年「足が痛い。」と言ってなかなか前向きに取り組めなかったのですが、今年になり「今日はベスト目指すね！」と自分から目標タイムを設定していて、大きな成長を感じました。確かにみんな一生懸命走り切っている姿も良いものでしたが、走り終わった後もこれからゴールする人を「頑張れ！」と応援している姿も素敵だなと思いました。苦しくても目標に向かって走る自分の心を鍛えると同時に、周りで頑張っている仲間を素直に認めていく心も養われているように感じました。懸命に走った結果努力賞のメダルをもらった R さんの「初めて（メダルを）もらった。」とつぶやいたときの笑顔がとても印象的なマラソン大会でした。

第１回マラソン大会

まごころホーム　加藤ゆかり

９月２４日，天候に恵まれ、第１回マラソン大会が開催されました。この日の為に、９月の上旬から、子ども達は練習を重ねてきました。今年は、みんなかなりタイムが良く、とても前向きに練習に取り組んでいた為、全員が３km を走ることになりました。私も、子ども達と一緒に３km 走ったことがありましたが、正直かなり辛かったです。大人でも辛い３km を毎日弱音も吐かず、練習に取り組んでいた子ども達は本当にすごいなぁ、と思いました。毎日きちんと目標を設定し、それを達成していく姿は本当に輝いていました。

当日は、みんなものすごく張り切っており、勢いよくスタートしました！みんないい意味で、その雰囲気に流され、今までの練習の成果を大いに発揮出来たのではないかと思います。ベストタイムを更新出来た子も何人もいました。みんな本当によく頑張っていました！

次は、１０月の愛育園祭に向けて、全員で力を合わせて準備をしていきたいと思います。

お誕生日会

主任保育士　石崎　早織

私事ではありますが、先日３０歳の誕生日を迎えました。私が愛育園で勤め始めたのは２０歳の時でした。きっと今の子ども達は若かりし頃の私の姿は想像も出来ないかもしれませんね。私にとって２０代が終わり３０代のスタートは一つの節目だと思っていて、今回の誕生日を迎えることに特別な思いを持っていました。ここ数年まごころの中高生から誕生日のお祝いをしてもらっていました。それが嬉しくて正直今年もお祝いしてもらえるのかな～と楽しみにしていましたが、誕生日当日は愛育園のマラソン大会だった為、みんな忙しくそんな時間もありませんでした。マラソン大会も無事終わり慰労会が始まりました。みんなの頑張った姿を動画で流すという流れになっていましたが、そこで流れたのは私と子どもたちが笑顔で写っている写真の数々でした。最初は何が起こったのか全然わからなくビックリしていましたが、途中で子ども一人ひとりからのお誕生日のメッセージが流れこれはサプライズなんだ！！と気づきました。メッセージを見てなんとも言えない気持ちになりました。きっと嬉しいという言葉だけでは言い表せないと思います。子どもの素直な言葉が私の心に届き涙が止まりませんでした。その後は高校生の女の子がこれまたサプライズで調理の先生方と本当にすごいケーキを作ってくれました。そしてみんなからはお祝いのメッセージが書かれた大きな色紙も頂きました。今まで自分の誕生日をここまでお祝いしてもらった事がなかったので、本当に本当に嬉しく心に響く誕生日会でした。また今回のことで、子ども達の強い思いや、素直な思いを聞くことができ、やっぱりこの仕事って素晴らしい！！と思いました。私は毎日笑顔でいられるのもいつも一緒に居てくれる子ども達のおかげです！！たくさんの思いを受け取った分、それを力に変えて子ども達に返していきたいと思います。そして子ども達と一緒に準備をして下さった先生方本当にありがとうございました！！

手作りの誕生日会

調理主任　伊藤　慈子

今年は、いろいろな事情から毎年恒例の大運動会が出来ない為、みんなが頑張れるマラソン大会になりました。ちょうどその日は、石崎先生の誕生日でもあり、子ども達みんな大好きな石崎先生に、サプライズで手作りの誕生日会をしようという事になりました。

冨澤先生の企画・進行のもと、ホーム職員みんな計画に参加し、子ども達中心の誕生日会を作り上げました。勘の良い石崎先生に内緒にするのは、本当に大変だったようです。

マラソン大会の後、食堂でマラソン大会の慰労会をするという前提で、表向きには準備してきました。私達調理でも、お菓子とジュース、ちょっとしたケーキを準備しました。石崎先生のためのバースデーケーキは、調理の宮沢先生の提案で、お菓子作りの大好きな高校生Ｓさんと二人で、人形を使ったドレス調にデコレーションされた素敵なケーキを作ろうと計画しました。

9 月 24 日午後、みんながマラソン大会で頑張っている最中に、Ｓさんと私達調理数人は残り、誕生日会の準備をしました。午前中にはプロジェクターの準備がされていました。

マラソン大会が無事終わり、食堂の準備も整い、バースデーケーキの準備もできたころ、子ども達と主役の石崎先生が入ってきました。職員もみんな揃ったところで、慰労会が始まり、マラソン大会の写真をみましょう！と、プロジェクターに写真が映り始めました。どれを見ても、子ども達と一緒に映った笑顔の石崎先生の写真ばかり。『石崎先生、お誕生日おめでとう』のテロップが流れ、子ども達ひとりひとりからのビデオレターになりました。子ども達みんな笑顔で素直に日頃の感謝の気持ちを言えていて、石崎先生は最初ビックリして、その後は泣き通しでした。一緒に見ている私達も、子ども達の可愛さに感動して涙が止まりませんでした。他にも色紙を 3 枚もつなげた特製超特大メッセージボードがプレゼントされていました。そこには、子ども達の自筆のメッセージがびっしりありました。石崎先生は、とても嬉しそう。そこに、ハッピーバースデーの歌と共に、Ｓさんと作ったケーキをＳさんが運び入れると、『わーっ！』と歓声が上がり、『おめでとう！！』の嵐でした。みんなびっくりして、『どうなってんの？』『どう作ったの？』と興奮気味。そこは秘密にし、ジュースで乾杯をし、お菓子とケーキを食べながら、石崎先生と子ども達は、デコレーションケーキと記念撮影をし、楽しい一時を過ごしました。大好きな石崎先生が喜んでくれた事が、子ども達だけではなく、私達職員もとても嬉しかったです。みんながみんな石崎先生のためにひとつになった、子ども達の温かい想いのこもった素晴らしい誕生日会でした。

調理室だより

栄養士兼調理員　原　未華

厳しい暑さも終わり、季節は夏から秋へと変わってきました。過ごしやすい涼しさになるにつれ、日もすっかり短くなりました。夕方になるとすぐに暗くなり、朝はなかなか明るくなりません。秋は収穫の時期でもあり、食べ物がおいしい季節です。先日、たくさんの梨を頂き、「もう秋なんだ」と改めて実感しました。

９月は敬老の日のお祝い、彼岸団子、おやつにおはぎを提供しました。９月２４日に行われた愛育園マラソン大会では、毎日練習して自分自身のベストを尽くした子どもたちの姿に感動しました。何でも一生懸命頑張っている子どもたちに何か出来ること限られるかもしれませんが、心を込めた温かい食事を毎日提供することはもちろんのこと、これから寒くなるにつれ、体調を崩さないように健康面の部分でも支えられるようにしていきたいです。行事がたくさんありますので、子どもたちと一緒になって楽しんでいきたいと思います。